

## Exciting and wonderful Stanford Summer Seminar 2011

千葉大学医学部附属病院 飯森 隆志

今回、世界のスタンフォード大学で研修する機会を得た。研修に参加した目的は、スタンフォード大学の最先端医療技術をこの目で確かめ、実際に体験する事であった。『百聞は一見に如かず』とはまさにこの研修そのものであったように思われる。

最も印象に残ったことは分子イメージングにおける数多くの PET トレーサーの開発、またそれを用いた最先端の研究や報告を目にすることが出来たことである。第一人者でもある Jianghong Rao, Rh.D.からは分子イメージングにおける Multimodality Imaging の将来性について Molecular Probes の開発, Molecular Targets の新発見, 動物実験への応用の観点から最新情報を提供していただいた。ナノテクノロジーと分子イメージングにおける未知なる可能性を感じさせられた。

全国各地から参加した 19 名の研修生と 1 週間ともに研修させていただいた。ルーカスセンターでの講義や施設見学が終わった後、夕食後のミーティングも日に日に打ち解け、最終日は日付が変わるまでディスカッションし、様々な意見交換が出来た事は非常に有意義であった。1 週間朝夕ともに過ごし『同じ釜の飯』を食べ、最後は研修生 19 名を『仲間』と思うようになった。様々な素晴らしい、魅力ある講義や施設見学もあったが、やはり終わってみれば『人』という財産を得たことを本当に嬉しく思う。これも素晴らしい『リーダー』の存在があったからではないだろうか。1 週間という短い研修期間ではあったが、自分自身もいろんな意味で成長させていただいた。しかしここで終わりではない、ここからが始まりである。6 期生の仲間やスタンフォード会の方々と密に親交を深め、本研修で得た経験を後輩達に継承していければと思う。

アメリカの放射線技師教育はスタート時点から専門性が問われ、職の細分化が図られている。実績とライセンスを積み重ねながら、より高度な医療技術を提供できるようにプログラムされている。しかしスタート地点こそ日米では異なるものの、我々が目指す『患者に優しい医療』という点では一緒であると思う。今後、日米放射線技師合同セミナーというような様々なディスカッションが出来る新企画が生まれることを期待したい。

最後に、本研修にご尽力いただいた Stanford 大学の講師の先生方やスタッフの方々、日本放射線技術学会ならびに GEHC-J の関係者の方々、また素晴らしいリーダーシップでメンバーをまとめていただいた神戸大学京谷氏、参加にご協力いただいた千葉大学医学部附属病院放射線部諸兄に深く感謝申し上げます。

神戸大学 京谷リーダー(右)と筆者。

